

『青森県史 資料編 近現代3』
「大國」と「東北」の中の青森県

森 武麿

「みちのく」東北、その最果ての青森は、首都東京から遠く、まさに「道の奥」である。私のように東京近郊で生活し、地方史・地域史を研究している人間にとつて、青森の歴史から、なにを学ぶことができるか、興味深い問題であつた。今回、「青森県史」(資料編近現代3)の書評を引き受けたのは、青森県六ヶ所村の戦後開拓に関心をもつて調査に入つたことと、「みちのく・青森」から、これまでの中央中心の歴史を見直すことが必要であるという思いからであつた。

はじめに本書の構成を記しておこう。

総説

- 第一章 「大國」化と県政
- 第二章 「民主主義」と県政
- 第三章 対外進出と軍事問題
- 第四章 凶作と救済・振興
- 第五章 地域改良と整備
- 第六章 模索と矛盾の中の産業
- 第七章 拡大する商工鉱業
- 第八章 都市と都市生活の諸相
- 第九章 「大國」化の中における教育

第十章 多様化する社会と文化

以上、本書は十章構成で、大正期、すなわち一九一二年から二六年までの、政治、軍事、地域振興策、産業・経済、生活、教育、社会と文化にわたる項目をほぼ網羅的にとりあげ、青森県域の実情を示す諸資料を編集、解説したものである。七八〇頁近くにおよぶ大部なもので全部読み切るのは容易ではない。しかし便利なことに、初めの総説と章ごとに資料解題が書かれており、本書の内容を大略知ることができる。

本資料集の狙いは次の通りである。日清・日露戦争を勝利した日本は第一次世界大戦で連合国側に参戦して戦勝国となり、国際連盟の常任理事国として「大国」の仲間入りをした。このことは同時に、明治期には工業化を含め別の発展の可能性もあつた青森県域にとって、中央と地方との格差が次第に固定化され、中央に対する「周辺」化を余儀なくされていく過程でもあつた。これを本書では「東北」化と表現している。

「大国」化と「東北」化のなかで揺れ動く、第一次大戦期から普選実施に代表される大正デモクラシーの時代の青森県の実態を、資料から浮き彫りにすることがめざされている。別の表現で言えば、日露戦後から第一次大戦期に、樺太（現サハリン）、「満州」を勢力圏におきながら中国本土を視野に入れて帝国主義化する日本と「周辺化」する青森県域の関係性を問うことが明瞭に意識されている。「中央」と「周辺」の対抗、じつに「青森」ならではの、興味深い問題設定である。

紙数の関係で章別の細かい紹介はできないので、章別に興味深い資料を紹介しておく。

第一章では、第一次大戦前後の知事の訓示など施政方針、市町村財政

の方針、第一次憲政擁護運動を取り上げている。とりわけ川村竹治知事の訓示（一九一七年）では、「東北独り世ノ進歩ニ後ルル」として「東北振興」を東京の人が唱えることに批判し「東北モンロー主義」さえ標榜して、現在の「我青森県ノ不振ハ（中略）結局県民進取ノ気象ニ乏シク人心萎靡ハサルノ致ス所ト断言シ得ル」として、「人ヲ養成」する「教育」に期待しているところが面白い（二三頁）。教育による青森県人の「独立自尊」論である。昭和恐慌期以降の第二期の東北振興との差異を考えさせるものである。

第二章では、「大戦後の地方自治」として民力涵養運動、国民精神作興運動、郡制廃止、第二次護憲運動と普選運動を取り上げている。青森の護憲運動の特徴を示すのが、第一章の資料ではあるが、『東奥日報』（一九一三年一月一三日）に示されている。「明治の維新と共に、東北が如何に屈辱を余儀なくされ、不遇の地位に立ち来れるかを知るものは、大正維新と共に、この偏私的大勢を打破」（五〇頁）することがめざされている。「東北」化される青森への差別と蔑視への抵抗のエネルギーが護憲運動を支えているのだ。

第三章では、第一次大戦と「大国」の軍隊、革命の衝撃とシベリア干涉、デモクラシー下の陸海軍、を取り上げている。とくに、弘前に置かれた歩兵第三連隊、青森に置かれた歩兵第五連隊という、異例にも県内にふたつの連隊を擁した「北方の要塞」青森県は、まさにロシア、「満州」（中国東北部）を睨んだ戦略的要衝であつた。このことがロシア革命からシベリア干涉戦争を示す資料の中から浮かび上がる。とくに、シベリア出兵として青森県人、陸軍一等鍛工長武田長七の一九二〇年の

「シベリア便り」(一七五頁)は面白い。現地住民から嫌われる心情が綴られている。

第四章は、凶作の状況、凶作の救済、東北救済と振興論を取り上げている。とりわけ注目されているが、一九一三年(大正二年)の大凶作である。全国的には一九三四年(昭和九年)の大凶作が有名であるが、青森県においてはとりわけ「大正二年大凶作」のもつ意義が強く語られている。この大凶作を転機として青森県民の教育を通じての「独立自尊」論が放棄され、救済による「他力本願」論に転じたという。それほど「大正二年大凶作」の衝撃が大きかったことを資料は訴えかけている。

第五章では、大湊開港と大湊興業株式会社、鉄道・通信の整備、港湾・河川改修の資料が掲載されている。とくに大正二年大凶作を契機にして、大湊開港と大湊興業株式会社による開発計画は注目すべきであろう。日露戦後の大国化による北方の要塞化とロシア・アメリカなどとの国際的な通商・貿易を展望して、大湊湾開発が東北振興の一環として登場していることである。これは現在の陸奥湾における原子力船の母港化の歴史的原点もいえるもので注目したい。東北振興は軍事と一体であった。

第六章と第七章は、産業史である。農業、畜産、林業、水産業、商工鉱業の資料を掲載している。とりわけ、明治末期に産地形成したりんごの動向が中心である。また、林業資料として東北森林管理局の明治から現在に至る資料はすばらしいものである。これから盛んになるであろう環境経済史の視点からしても、今後東北森林管理局の資料は全国的に有益な資料となろう。

第八章は都市生活の諸相であり、保健衛生、社会・労働運動、社会政

策などを取り上げている。青森はとりわけ不衛生による目の疾患トラホーム(トラコーマ)が多い。これとその後、農村医療、無医村問題などは、「東北」化がもたらした社会矛盾である。社会運動では、青森県は米騒動が起きなかった数少ない県であるが、大山郁夫などの政治研究会の組織が活発で、社会主義思想が先駆的に導入された県でもあった。のちに共産党の動きに繋がっていく秋田雨雀・淡谷悠蔵など、エスプレンティストやコミュニストが活躍するのも青森県の特徴であった。産業の後進性と政治的先進性の並存、この問題をどう理解すべきであろうか。

第九章は教育問題である。ここでも大正二年大凶作が教育に深い影響を落としている。欠食児童、不就学児童、学級閉鎖、教員の給与不払いなどの資料が取り上げられ、昭和恐慌期に東北全域で起きたことが大正初頭にすでに青森県で蔓延している。それだけに県民の教育にかける熱意は熱いものがあつた。大正期の官立弘前高校の設立、私立学校、青少年や婦人への教育の充実が進むのもこの時代である。

第十章は、社会と文化であり、映画や各種娯楽の普及の資料が取り上げられている。とりわけ、印象的なのは郷土主義と地方主義の対抗である。郷土主義が秋田や淡谷などの社会主義者を担い手としており、地方主義が福士幸次郎のように右翼、ファシズムに傾斜する人物である。一九二四年の両者の論争を掲載した資料は見応えがある。郷土主義を、コスモポリタンのエスプレンティストが担うこと、おなじくインターナショナルな社会主義者が担うことに興味を覚えた。一般的には郷土主義はナショナリズムの強まる中で国家主義的な勢力が担い手となることが多いのに対して、青森では反体制が担い、ファシストと対抗するなど先

鋭な対立を生み出している。また黒石に「日本のザメンホフ」と称された高橋邦太郎の存在など興味深い。青森県は、「周辺」であるがゆえか、「東北」化のゆえか、既成体制に「反旗を翻す思想が、脈々として生き続けていることは、興味深い点である。

最後に「移民と出稼ぎ」の資料が掲載されている。これは青森県の特徴を示すものとしてたいへん重要である。「大国」化のなかで、樺太、北海道、北洋漁業への出稼ぎ者の群れを、「辺境」化する青森県は、生み出したのである。殖民、移民、出稼ぎも、青森県のもうひとつの特徴であることを示している。

以上のように、資料を読みながら、感想を述べるうちに紙数が尽きてしまった。最後に簡単にまとめておこう。

青森の歴史から何を学べたのか、これまでの歴史の見直しに、本資料集はいかなるインパクトをもたらすのだろうか。私にとって次の三点がもつとも印象に残った。

第一は、「大正二年大凶作」の歴史的意義である。陸の凶作だけでなく、海も不漁であったため、最底辺の貧民は困窮のあまり北海道や鉱山への出稼ぎに追い込まれた。大湊港開発計画もここに始まる。このときから東北振興が始まった。一九二六年に一端途切れるが一九三〇年代の昭和恐慌期にふたたび復活する。東北振興運動の起点は一九一三年の青森県にあったのだ。「東北」化は昭和恐慌期ではなく、日露戦後不況と「大正二年大凶作」が原点であることを青森県の歴史は教えている。

第二は「北方の要塞」として青森県である。県にふたつの連隊、軍馬の育成県、一九一五年の陸軍大演習の実施、青森港、大湊港の開発は、

「北の要塞」の宿命である。青森県は、ロシアのウラジオストク、シベリア、「満州」、樺太への前線基地であった。青森県がまさに「大国」化の最前線である。ここに辺境と貧困と軍事の三連環を見ることはたやすい。これは現在の六ヶ所村問題に連なる問題でもある。

第三は、北方貿易の拠点としての青森県である。中央から疎外され、工業化から取り残された青森県では、目を転じて、樺太、ロシア・シベリア、中国・「満州」など、北方貿易に活路を求めて、北方交易圏をめざす動きに注目したい。たとえば、鈴木誠作の大湊興業株式会社構想（一九一八年）である。りんごの場合も青浦商会に見るようにウラジオストクへの輸出はロシア革命までは盛んであった（四七二頁）。また青森県はハルビンへ商品陳列館を設置して、果敢に「満州」進出を企てている。これは「東北」化、「大国」化の論理とは異なり、首都圏から遠いという不利な地理的条件を、プラスに転ずる論理である。「周辺」化を逆転して、新たな「中心」をつくる動きであるともいえよう。ちょうど中世において陸奥十三湊が注目されているように、古くから北方交易のルートは青森県とつて歴史的蓄積があり、近代の動きもその延長線上にある。近代におけるこれら中国東北部・ロシアなどとの北方交易の動きは挫折したとはいえ、いまなお私たちに「未発の可能性」として語りかけている。

さらに、青森の左派「郷土主義」が、インターナショナルであり、コスモポリタンの視点から、新たな「郷土」を模索していることも興味深い。秋田雨雀や淡谷悠蔵のように、ボーダレスな思想を生み出した経験は、「周辺」であるがゆえに先進的でありえたともいえる。「東北」化

されていった青森県の大正期の社会運動の経験から、今度は「中央」が学ぶ必要があるようだ。

「いま青森県史が面白い」というのが私の率直な感想である。

最後に一言。青森県は県庁資料が空襲で完全に焼失し、全国でも稀なほど資料条件に恵まれない県史である。そのなかで、市町村役場文書、個人文書、営林署など県内諸機関の資料をよく渉猟して、このような見事な県史大正編を作られたことに敬意を表したい（ただ時期区分として明治・大正・昭和のように元号で分けることには疑問）。

他の県史、市町村自治体史、そして歴史研究者は、本資料集をぜひ一読、必携されることを期待したい。青森県ならではの多くの有益な歴史的知識とインスピレーションをえることができるであろう。

（A4判、七八〇頁、青森県、二〇〇四年三月刊、価格五八八〇円）

（もり・たけまろ 一橋大学大学院経済学研究科教授）